

識者に聞く

インフラ軽視は敗北を招く

藤井 聡 (京都大学大学院工学研究科教授)

以前、中曽根康弘元首相と話をする機会があったのだが、その際、中曽根先生が「政治は土木である」とおっしゃったことが強く印象に残っている。もちろん、建設業界の話をしているわけではない。「土木」という営みが、日本の政治の根幹にあるということだ。

土木という営みとは、我々が住む文明環境がどうあるべきなのかを考え、それに基づいて具体的に行動することだ。我々はこういう文明国家になるのだとの思いのもと、それに見合った文明環境を整えることが、土木の仕事と言える。

大和朝廷の時代以来、先の自民政権に至るまで、多かれ少なかれ、日本の政権を担ってきた人々の間には、日本的なもの、伝統的なものを保守しようとする意思が明確に存在していたことは間違いない。

ところが、民主党政権には、伝統的なものを保守しようという意識がほぼ消えうせているように思える。政権に保守の意識がなくなったという点で、日本史における最初の事件であるとすら言えよう。

民主党の言う「コンクリートから人へ」という政策では、経済競争で完全な敗北を喫することは目に見え

ている。我々の経済水準を著しく低下させ、国民が貧困にあえぐことにならざるを得ない。

民主党政権は、日本の社会ではなくて、一人ひとりのいま見えている暮らしを守ればよいと思っている。しかし、インフラストラクチャーこそが、我々の暮らしの土台にあるものだ。ハード的なインフラがコンクリートであり、ソフト的なインフラが伝統文化である。彼らは、ハードとソフト双方のインフラが存在して初めて、我々の暮らしがあるという常識を忘れていくかのようだ。

諸外国と比べて貧困な道路網

高速道路はもう必要ないという人もいるが、それは的外れだ。米国や英国などでは、渋滞なども勘案して実際に時速80km以上で走れる道路ネットワークが、国土の大部分をカバーしている。一方、日本のネットワークはほとんど歯抜けの状態だ。日本の高速道路の整備水準は、先進



藤井 聡 (ふじい さとし)

1968年生まれ。93年、京都大学大学院工学研究科修了。同大助手、スウェーデン・イエテボリ大学客員研究員、東京工業大学大学院助教授、同大学院教授を経て、2009年4月から現職。専門は土木計画、交通計画

諸国と比べて著しく低い。

神戸や横浜の港湾は、80年代まで世界トップ水準で、経済立国としての日本の地位を高めていた。しかしこの20年間に、諸外国では港湾が大幅に巨大化された。釜山や上海では、日本の港に入れられないような巨大な輸送船を引き受けることができる。日本は港湾整備を怠ったために、近隣の国の大きな港に頼らないと貿易ができない国になっている。

問題は、規模の大きな港湾や空港を造る権限を、日本の政府が持っていないことだ。政府が強い権限を持てば、諸外国のようにいくらかでも造れるはずである。

これまで、政府が大きなプロジェクトを進めようとする、誰が批判したのか。それは、国民であり、自治体であり、知事だ。日本の政治が駄目なのではなくて、国民や財界の力に比べて政府の力が小さすぎるといふ抜本的な問題が、戦後日本にはある。(談)